Yutakana Times

Vol.03 2012.01.09 News from Helsinki http://yutakana.org

「オーロラ」の地で（1）

ユタカナ
yutakana.org

大晦日の夜

フィンランドで暮らし始めて3回目の年越しを目前に控えた、2011年の大晦日。新年へのカウントダウンの花火で、家の周りは騒々しかった。次々にあがる花火の音を聞きながら、私はオーロラについて考えていた。これまでオーロラに対して特別な憧れを持ってきたわけではない。オーロラとの最初の接点は、高校生の頃に見た「さんま玉緒のお年玉! あんたの夢をかなえたろかスペシャル」というお正月番組だ。スタッフが全国各地の人々に「夢」を聞き、その中からいくつかの「夢」を叶えるべく応援するという番組だ。ある女の子の「オーロラを見たい」という夢が取り上げられていた。その子の夢が実際に叶ったかどうか覚えていないけど、「オーロラ」ってなんだかすごそうだということを知った。それ以来、お正月が近づくとときどきオーロラのことを思い出す。

オーロラは、北極や南極の近辺で見られる大気の発光現象だ。北極圏では "Northern Lights" とも呼ばれる。フィンランドは、面積の1/4が北極圏内にあり、北部のラッピ州では年間200日見られると言われている[*1]。オーロラが見られるかどうかは太陽の活動、天候、周囲の光の強さなど様々な条件に左右される。インターネットで、 "Aurora Forecast" と検索すると、いつどこで見られるかについて、様々な予報を確認することができる。

フィンランドでの大晦日は紅白もないし、二人暮しでは華やかなおせち料理の準備もない。なんとなく祝祭性を求めて、オーロラのことを調べ始めたら、2012年は特別よく見えるらしいというNASAの調査結果に出くわした。ためしに次の週末の航空券価格を調べると、ヘルシンキから北極圏の町まで往復で1万3900円。北極圏にはおもしろい文化施設もあり、その調査もしたいという話になった。外のカウントダウン花火の盛り上がりがクライマックスに達する中、えいやで航空券を予約した。

*1 出典:フィンランド政府観光局運営サイト
https://www.visitfinland.com/ja_JP/web/guest/finland-guide/about-finland/nature/northern-lights ※2012年1月に参照

できる限り北へ

突然決めた旅なので、特別予算があるわけではない。週末だけの弾丸旅行だ。最低限の費用と期間で、確実にオーロラを観測する方法を調べた。わかったことは、

- 北極圏の中でもできる限り北へ行くこと
- 街から離れること
- 観測するときは辛抱強く待つこと

フィンランドの中で最北部にある空港イヴァロ行きのチケットを予約した。オーロラの繊細な光を確認するには、人工的な光"light pollution（光害）"のない場所にいかなければならない。色々調べた結果、イヴァロ空港からアクセス可能であり、光害の少ないイナリに滞在することにした。イナリには、湖や川のそばに、ひっそりとたたずむ宿泊施設がある。宿泊施設から徒歩圏内に光害のない静かな場所があり、オーロラが出るまでじっくり待機することができる。これなら高額のオーロラ観測ツアーに参加する必要もない。

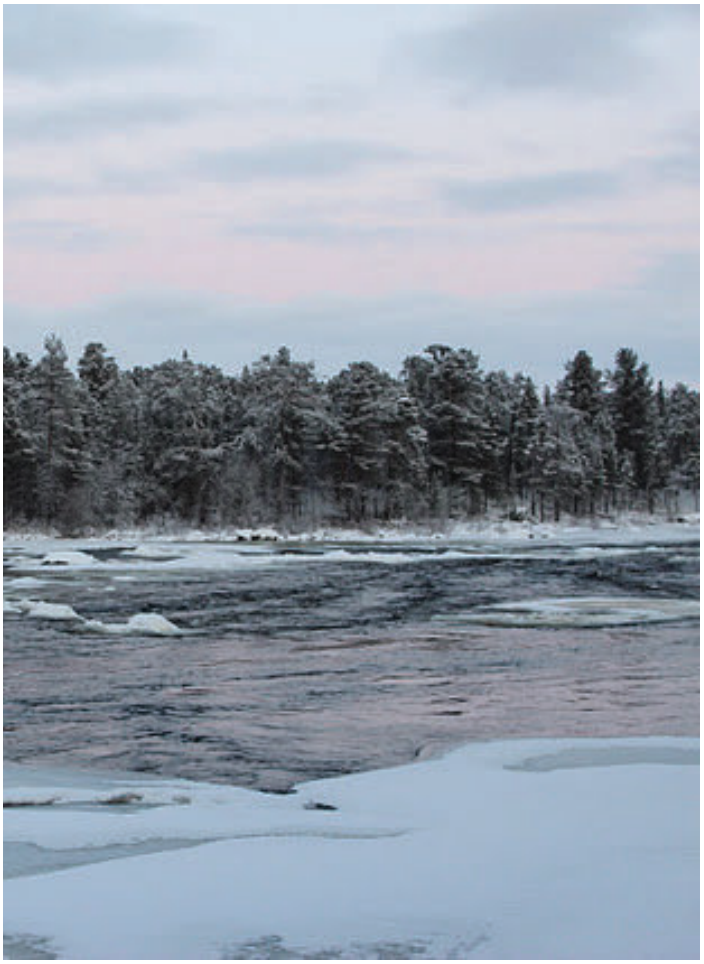
In the middle of nowhere

こうして新年早々の週末に、「弾丸旅行」に出発した。首都ヘルシンキからイヴァロまで、飛行機で約1時間35分、931kmの距離 だ*2。雪で覆われた小さな空港から、タクシーとバスを乗り継いでイナリに向かった。バスは、人里離れた、人っ子ひとりいない雪原をひたすら駆け抜ける。40分ほど経った頃、バスは、給油機が1台だけ置かれたガソリンスタンドとも駐車場とも言えない停留所に止まった。

*2 出典：フィンエアー公式ウェブサイトより
http://www.finnair.com/finnaircom/wps/portal/destinationIntercontinental/flightTimes/ja_JP ※2012年1月参照

Inari

イナリはフィンランドの自治体の中で最大の面積を誇る。人口は約7000人で、そのうちの1/3は先住民族サーミの人々である。レンメンヨキ国立公園、ウルホ・ケッコネン国立公園があることでも知られている。フィンランドの湖の中で最大級のイナリ湖のそばの宿泊施設に滞在した。

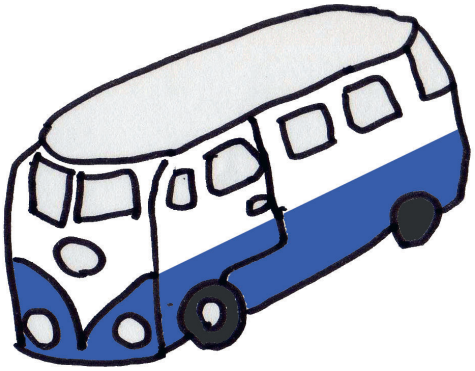


バスが去った後で

今回、オーロラ観測のチャンスは二晩しかない。到着した日の夜、空は一面曇りで雪が降り続けた。貴重な1回目のチャンスはあっけなく消えた。北極圏の名物トナカイ料理に励ましてもらうしかなかった。新鮮なトナカイの肉のソテーとマッシュポテトとベリーのソースの組合せは、フィンランドを代表する料理のひとつだ。次の日の夜に向けて力を蓄えるべく、堪能した。

そして迎えた2回目にしてラストチャンス。アラスカ・フェアバンクス大学のGeophysical Instituteという機関が発表している「オーロラ予報」を確認すると、オーロラの活動レベルは低いものの、前日よりも観測できる可能性は高そうだということが分かった。空を見上げると雲は少なく、月も星もきれいに見えている。早めの夕飯をすませて、「オーロラ・ハンティング」の支度をした。

今年はフィンランド全体が暖冬なので、幸い寒さはそれほど厳しくない。夜でもー10度程度。しかし長時間になることを考え、最善の準備をしなければならない。上から、毛糸の帽子、マフラー、下シャツ、長袖シャツ、セーター、フリース、アウトドア用のアウター、手袋2枚重ね、スパッツ、アウトドア用のズボン、靴下2枚重ね、靴下用のカイロ、スノーブーツ。予備のカイロをさらにポケットにしのばせた。地元の人に尋ねたところ、湖のそばの橋か、湖のわきの道がおすすめの観測地だと言う。20時を過ぎた頃、そこに向かった。



まずは橋の上に立ってみた。とにかく空が広く見える。こんなに空を見渡したことはない。北の森の奥からも、東の湖の奥からも、いつオーロラが出てきてもおかしくない雰囲気が漂っている。懸念があるとすれば、橋を照らす街灯と、時折横切る車の光だ。20時以降23時くらいまでがよく出る時間帯と聞いたが、30分しても見えない。寒さ対策は万全と思っていたが、雪の積もった地面に立ちじっとしていると、じわじわと体中が冷えていく。

何時間粘れるだろうかと不安に思い始めた頃、1台の大きな観光バスが近くに停車した。オーロラツアーでここに来たらしい。お客さんは暖房のきいたバスの中で待機している。運転手さんだけがバスを降りて、空を確認している。どうやらここが観測しやすい場所であることは間違いないようだ。

1時間ほど経った頃、バスからお客さんがぞろぞろ降りてきて、私たちが立っていた橋の上に来た。5分ほどキョロキョロあたりを見回して、またバスの中に戻っていった。そして、間もなくバスは出発した。どうやらツアーの時間が終了してしまったようだ。

時計を見ると22時。私たちもいつ切り上げるかが問題だ。街灯のある橋を離れて、湖の脇の、光のない場所に立ってみることにした。そして30分ほど経った頃、雲だと思っていたものの動きがおかしいことに気づいた。旗がたなびくようにゆらゆらしている。でも、どうもテレビや写真集で見たことのあるオーロラの華やかな色とは違う。よくよく見ると、夜空に溶け込んでしまいそうなうっすらとしたグリーンだ。とにかく写真におさめることにした。あわててシャッターを切ろうとするが、おりない。あたりが暗すぎるので、オートフォーカスが機能しない。マニュアル操作に切り替えて、シャッターを切った。

液晶画面で写真を確認すると、空にはうすいエメラルドグリーンの帯状の光があった。肉眼では確信出来なかった「オーロラ」の姿だった。次の瞬間空を見ると、帯はあっという間に形を変えて消えていく。また慌ててシャッターを切る。そんな追いかけっこをしているうちに30分が経ち、やがてオーロラの姿は見えなくなってしまった。「光のカーテン」というほどダイナミックではなかった。「人生観が変わる」というような大掛かりな効用はなかった。でも、美しかった。これまでに見たことのない、どう形容していいかわからない空の色だった。足も手の先も寒さで感覚がおかしくなっていたが、心は興奮していた。

→次号　「オーロラ」の地で(2)　に続く

写真・文章・イラスト 大橋香奈　エディトリアルデザイン 大橋裕太郎
© 2011 ユタカナ（yutakana.org）　無断転載しないでください